論文

# 言語・文化融合型テキストを用いた主体的な学びに関する考察
## ―韓国語学習を事例に―

金　恵媛（山口県立大学）
呉　香善（下関市立大学）
張　允麐（北九州市立大学非常勤講師）
金　貞愛（北九州市立大学）

# Active Learning Using Textbooks that Integrate Language and Culture
## ― A Case Study of Korean Language and Culture Learning ―

KIM Hyeweon (Yamaguchi Prefectural University)
OH Hyangsun (Shimonoseki City University)
CHANG Yunhyang (The University of Kitakyushu Part-time Lecturer)
KIM Jungae (The University of Kitakyushu)

**Abstract**

In this paper, we've developed a Korean language textbook and used it in pre-intermediate Korean classes at several universities. This paper also mentions the benefits of language classes that combine language and culture.

In these case studies of Korean classes, the language skills of the students vary widely, and intermediate classes are often small. Also, most of the students are more motivated to learn about culture than language. Recently, it has been observed that most of the students prefer learning cultural studies over language learning than languages.

Therefore, we've made a language textbook to learn about Korean culture, and strengthened the self-study aspect before and after classes. During the class, many group activities were carried out that were easy to participate in even if the language level was different. As a result, it seems that the comprehension level of both language skills and cultural interests has increased. An increase in active learning ability is also observed in the students' reflection sheets.

### 1　はじめに：異文化リテラシー向上のための言語・文化授業の試み

従来、大学における韓国語教育は語彙・文法中心の語学教育に重点をおかれる傾向があった。ところが近年の研究から、効率的な外国語学習のためには、「書く・聞く・読む・話す」の言語４技能の熟達のみならず、対象言語の背景にある社会や文化についての理解を深めることによってコミュニケーション能力がより促進されるということが指摘されている（OH、2014）[1]。外国語教育をめぐる文部科学省の有識者会議の報告[2]においても、言語と不可分の関係にある文化に対する理解を融合させることが外国語コミュニケーション能力の上達につながるという知見が述べられている。

1　呉（OH,2014）は、外国語コミュニケーション能力とは、外国語教育を通して培う言語運用能力と異文化間リテラシーの統合されたコンピタンスであるため、不可分な関係にあると指摘する。

2　文部科学省の有識者会議の報告（コミュニケーション教育推進会議審議経過報告「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」平成23年８月29日）では、外国語コミュニケーション能力について、その背景にある文化に対する理解を深め、他者を尊重し、身近な話題から社会や世界、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え合ったりすることができる能力として整理している。

しかし、文化リテラシー[3]を意識した外国語学習への関心は高まっているものの、文化的要素をどのように授業に取り入れ進めていくのが効果的なのかに対する枠組みや議論はまだ不十分である[4]。教育現場においても、韓国文化を扱う必要性を認めつつも、時間が足りない、まだ経験が浅い、対象範囲が広い、情報に乏しい、適切なテキストがない等々、様々な理由で実践に二の足を踏む場合が少なくないと考える。

本稿は、上述したような言語教育と文化教育をめぐる問題状況の改善を目指して、言語・文化テキストの制作状況および授業での実践状況、そしてこの一連の過程から得られた課題についてまとめた実践的研究である。研究の目的は、言語と文化学習の融合、自学習慣の育成、異文化と自文化の相互理解能力を育成するための教材開発および授業運営方法の改善についての考察にある。テキストを言語・文化理解を融合して学習できる内容構成にし、授業運営においては自主学習を含む学生の能動的な参加が得やすい方法を工夫した。以下、テキストの特長、授業での実践状況、そして今後の課題を中心に述べる。

## 2　テキストの内容構成と特長

### 2－1　テキストの構成が決まるまで

近年、韓国語受講生の韓国語を学ぶ目的の変化、それによる授業運用方法にも様々な模索がみられる。韓国語受講生の授業選択の理由をみると、「韓国の文化（K-POP、ドラマ、韓国の芸能、料理）に興味がある」「旅行に行きたい」という内容が多い。

長谷川・藤原（2014）は「授業目的と心理的欲求の充足度」の調査を行った。人間の３つの基本的心理的欲求である「有能さの欲求」「自律性の欲求」「関係性の欲求」と自律的な動機付けの関係性を測るものであり、具体的には、授業目的について「１．○○語の文法の基礎をマスターする」「２．○○語で簡単な会話ができるようになる」「３ .○○語の簡単な文が読めるようになる」「４．○○語圏の文化を理解する」「５．その他」の選択肢から該当するものを選んで充足度を測る（87頁）。授業目的として①「文法の基礎」を選択した7363名では「有能さ」3.31、「自律性」3.35、「関係性」3.76であったが、同項目を選択しなかった7169名の場合は、「有能さ」3.35、「自律性」3.43、そして「関係性」3.90という結果であった。「文法の基礎」を選択しなかった学習者の方が充足度の高い傾向が見て取れる。同様のことは授業の目的を「簡単な読解」においた場合も観察された。

次に、授業目的を②「簡単な会話」とした5000名は、「有能さ」3.42、「自律性」3.45、「関係性」3.95を示した。それに対し「簡単な会話」を選択していない9532名では「有能さ」3.28、「自律性」3.36、「関係性」3.76となっており、「簡単な会話」を選んだ学習者の充足度が相対的に高い結果となっている。④の「文化理解」を選択した場合は「有能さ」3.32、「自律性」3.51、「関係性」3.85、「文化理解」を選択していない場合は「有能さ」3.33、「自律性」3.38、「関係性」3.83で、「文化理解」項目を選んだ学習者の方が自律性と関係性において充足度が高い。以上の結果から、文化理解において授業の充足度に高く表れることが言語学習の動機づけにつながっているといえる。

語学学習において言語のみならず、背景となる文化をも含めて総合的に学ぶことや、授業に能動的に参加できる経験は、自文化および異文化について関心を持ち、さらには生涯にわたって学び続ける土台となるであろう。だからこそ、自主的に「韓国の社会や文化と接する・見つめる・語り合う」機会を増やす、それらの事象について「韓国語で表現する」言語能力を身につける場としての役割が、今後の韓国語の授業に期待されていると考える。

「Enjoy !! 韓国言語・文化」テキスト（以下、本テキスト）が目標とするような能動的な言語・文化学習の仕掛け、文化リテラシーの向上を目指して気軽に活用できる学習ツールへのニーズは、今後ますます高まるであろう。本テキストは、多様な韓国語表現に出会う、韓国文化についての知識・理解を深める能動的な学びを支援するツールとして初・中級向けに企画されたものである。

日本の大学における１コマの講義は、90分を基本とし、各学期は15回の講義と期末テスト、合わせて16回の講義運営のところが多い。本テキストは日本

3　Cultural Literacyとは、1980年代にアメリカの教育学者 E. D. Hirsch, Jr.によって提唱された用語である。読解力とは単に読み解く能力ではなく、その背景にある幅広い知識（生活や行動様式、価値観）を必要とするという考え方から生まれている。

4　CHO（2010）は、文化リテラシーを意識した外国語学習に対する関心が高まっているものの、教育現場では議論の成果が反映されているとは必ずしもいえず、教育課程、教育資料、教授法に関する研究が不十分であると指摘されている。

の大学で学ぶ中級レベル（TOPIK中級、ハングル検定３級程度）の内容を基本としつつ、全８課構成、各単元をそれぞれ総８頁で組み立てた。１つの単元を２回にわたって学ぶことで８課全部を学習できるようにし、学習者が達成感を得られる効果を図りたいと考えている。

内容面では、衣・食・住の基本となるテーマおよびキーワードをそろえ、とりわけ従来の伝統文化的なトピックより、主な学習者である大学生が興味を持ちやすいテーマを中心に選定した。

第１課　ビビンバ（食べ方の違いにも注目！）
第２課　配達文化（デリバリー）
第３課　アパート社会
第４課　ファッション
第５課　「ひとり○○」文化
第６課　結婚と恋愛
第７課　パーソナルスペース
第８課　呼び方

本テキストが目指す文化リテラシーとは「文化というものを理解し、扱う力」を指す。従来の韓国語テキストのなかにも韓国の社会や文化について紹介するものはある。しかしながら、大概はそれがメインではなく、豆知識のように異文化の紹介のみにとどまる場合が多い。そのようなテキストでは文化リテラシーを向上させるには限界がある。単元ごとに文化に関する説明と写真を提示しているものの、それに対する疑問や討論を促す作りにはなっていないからである。本テキストは学習者自らが韓国文化について調べ、自文化と比較したり、他者の意見を聞くグループワークといった総合的な学び、アクティブ・ラーニングを意識した教育を目指す。学習者自ら調べて、相違点や共通点を見つけ、比較し、異文化への戸惑いを軽減することをねらいとしている。また、それぞれの文化の特殊性を認識し、間接的な異文化体験を通して自分が属する文化を再認識するきっかけを作りたいと考えている。

## ２－２　各ページの特徴

各単元の構成は総８頁にし、頁ごとの大まかな内容は以下のとおりである。

①絵をみて話してみよう（気になる？⇒気づく!!）
②エピソード：違いを知る・尊重する
③トピック本文・核心表現：コンセプトを読み解く
④学びのひろば：主体的に学びを深める
⑤ことばの森：テーマ関連の表現
⑥スキットを完成させよう!!
⑦コンセプトを広げる：マインドマップであそぼう
⑧＜テーマへの道しるべ＞：資料探究

１頁目の「絵をみて話してみよう（気になる？⇒気づく!!）」では、導入段階といえるが、各課のテーマと関連するイラストを提示し、そのイラストを見て浮かぶイメージや気づきを話し合うかたちで学びを進める。まず、学習者にテーマと関連した知識がどのくらいあるかを確認する。とりわけ、このページで気をつけたい点は、カラー写真の場合、時間の経過とともに古く感じられたりするので、なるべく使用しないようにする。すなわち、カラー写真の代わりにイラストを用いて基礎知識がない状態でもイラストを見ながら連想されることを話せる項目を設けることである。テーマへの関心度がわかりやすい頁であり、基礎知識が不充分な場合でもイラストからイメージを膨らませることができる。

２頁目「エピソード：違いを知る・尊重する」にはテーマと関連する筆者の異文化体験を紹介する日本語文（100～150字）を提示する。具体的かつ身近な事例を示すことで似たような感覚で学習者の経験を引きだし、学習者が関心を持ちやすくする。さらには自分の経験も展開しやすい雰囲気づくりを心掛ける。社会的イッシューについて個人のレベルに置き換えて理解する学び方としても有効であると考える。話し合ったものをもとに日韓の比較を行い、その時代状況や文化発生の経過に関心や意欲を持たせることで、文化リテラシー能力を向上させることが可能であろう。また、与えられた材料から必要な情報を引き出し、次のトピックの内容に導くことができる。

３頁目「トピック本文・核心表現：コンセプトを読み解く」では、流行現象に頼ることのないよう注意しながら、当該テーマを多面的にとらえた内容を中心に解説を行う。分量は500～600字程度にとどめ、過度の学習負担にならないようにする。なるべく日本との相違点・類似点に気づく、背景について議論が展開できる内容にまとめる。それから韓国文化の優越感を感じさせる部分が含まれないようにトピック内容の構成に注意を払った。その理由は偏った価

値観を極力排除し、両面性や多様性を提示する必然性を認識しながら作成すべきだからである。そこから自分が属する文化にも新たな気づきや、異文化への新発見も期待でき、議論する範囲が広がると考える。ここでは日本との相違点がどのように学習者に受け入れられるかを注視する必要がある。

同じ頁に使えるようになりたい「核心表現」を提示し、社会・文化的な事象のイメージと韓国語表現の連携を容易にし、文法の勉強につなげられるようにする。言語中心の授業の場合、教師の授業内容の調整は練習問題の配布資料を用いることで増やすことができる。授業後の学習者の自学にも活かせるように促す機能をもつ。

４頁目「学びのひろば：主体的に学びを深める」は、学習を通じてはじめて得た知識やもっと調べたい内容などをメモし、自主学習からの疑問や気づき、授業中の記録に自由に使えるスペースとなっている。さらに事後学習につなげるねらいである。

５頁目「ことばの森：テーマ関連表現」ではトピックに出てくる新出語彙の中でも重要度の高い語彙、韓国語能力試験の中級と「ハングル能力検定試験」３級４級のレベルに合わせた語彙と日常生活で欠かせない語彙をまとめる。「ことばの森：テーマ関連の表現」のリストに辞書を引かなくてもわかる表現については○をつけてもらい、学習したことはあるが覚えていない曖昧なものには△を、学習したことのないものについては×記号をつけてもらい、学習者の学習状況を教師と学習者自身も視覚的に確認できるようにする。

６頁目の「スキットを完成させよう‼」には、トピックと関連する文化学習を場面ごとの会話練習で身につけられるようにする。トピックとの関連性をもつ場面設定が必然的だからである。登場人物が２人～３人のスキットを提示し、その際、会話文の応用範囲を広げる、学習者のレベルにカスタマイズしやすいような空欄を複数か所設けて、登場人物、場所、時間、ものなど多様な表現を差し替えながら会話練習ができるようにする。

７頁目「コンセプトを広げる：マインドマップであそぼう」には、関連する核心になる用語を提示し、何カ所かは空けておき、またその語彙と関連したキーワードを学習者に考えてもらう。ここでは自主学習、グループ学習を強化する仕掛けとして、学習者の考えをどんどん追記できるマインドマップのような図形を導入する。真ん中にキーワードを提示し、第２レベルのテキストの一部は空欄のままにしておく。ブレインストーミングで関連テーマの多様な韓国語表現を収集し、そのことばを手掛かりに韓国の社会・文化的な特徴についてより深く探究していく。自由にアイディアを出して、また他者との対話を重ねながらスペースを埋めていき、さらに関連するものを想起させて広げる思考を目指す。グループ学習のなかで他者の意見に傾聴することによって、韓国文化・社会について多面的な理解がより容易になると考える。

８頁目の「＜テーマへの道しるべ＞：資料探究」は、学習者がトピックについてより深く理解するうえで必要な道しるべとなる参考資料の一部を提示する。得た知識および利用能力を伸ばすトレーニングにつなぎ、次のトピックについての調査も指示できるようにする。事前事後学習を通して受講生がまとめた資料を追加する形式にすることで、学生の積極的な参加を促すねらいがある。

以上のように言語と文化をともに学習しながら文化に接する学習態度や、文化についてより深く考えるテキストにしたい。

## ３．韓国語で韓国社会・文化を学ぶ

本章では、本テキストの一部を用いた各執筆者の教育実践状況について報告を行う[5]。はじめに授業の概要について概観し、続けて授業の方法、テキストに対する評価および課題を中心に述べたい。

### 3-1　事例１：韓国語初・中級クラスにおける言語文化授業

（１）授業概要および受講生の特徴

本テキストを用いた授業は[6]、２-３年次を対象とする韓国語初・中級クラス（後期）において行われた[7]。授業の目的は、韓国社会・文化を理解するうえで必要な韓国語の総合的な運用能力を身に付けることに

5　本章の各節は、実践担当者の作成によるものである。したがって、各大学のカリキュラムによって韓国語初・中級クラスの位置づけ及び授業の方法、本テキストの用い方が異なることを断っておく。

6　本授業の概要はYPU Potalの「総合韓国語Ⅱ」のシラバスに依拠している。

7　テキストと科目設計の整合性については、初回の授業で受講者に説明した。授業実践を通して、各課の内容構成について学習者目線からのコメントを得ることができた。

ある。授業の方法としては、身近な話題を取り上げた多様な形式のテキストを活用して読解・聴解・要約・発表、そしてこなれた日本語への訳出に重点を置く。到達目標は、辞書を用いて、比較的に長い情報をまとめる能力、ハングル能力検定試験３級、あるいは韓国語能力検定試験３～４級レベルに設定されている。受講生の韓国語レベルを判断する材料として２年生の大学入学後の韓国語の履修状況をみておくと、１年次に８コマ（１コマ＝90分；選択必須）、２年前期に韓国語を２～３コマ（選択）を受講している。

韓国語関連の検定試験の受験状況についてこれまでの状況をみると、受験歴のない学生からすでに中級を獲得している学生に至るまで、クラス内の韓国語レベルに差異が認められる。近年、多くの韓国語クラスで指摘される特徴でもあるが、K-POPや韓国アイドル、韓国コスメへの関心など、個別の学習動機・機会の有無がレベル差の背景要因と考えられる。

このような状況は１年次の初級クラスにおいても同様にみられるが、入学して初めて韓国語を学ぶ学生から学習不安の相談を受けることも珍しくない。大学での韓国語の学習環境の改善という観点からも、語学レベル、文化面への関心などといった受講生の多様性を活かした授業運営が必要である。類似した語学スキルを持つ受講生を想定した語学中心の講義ではなく、受講生が関心をもつ文化的要素を取り入れたり、語学能力の差異を補完できるグループ学習へのニーズが高くなってきたように見受けられる。

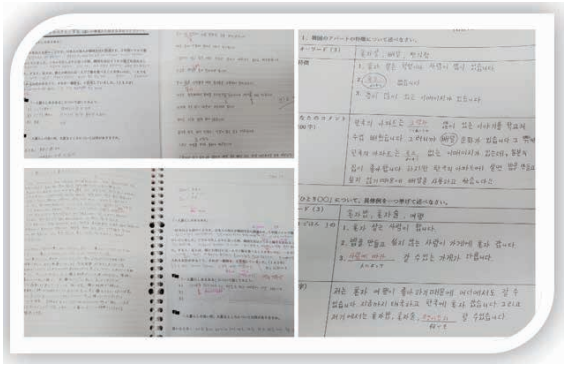
受講生の学習目的・目標の変化にも注意が必要であろう。近年の傾向として、韓国語でSNSのやり取りがスムーズにできるようになりたい、ニュースや気になる出来事については現地の報道や受け止め方も知っておきたいなど、極めて実用的、具体的に学習の目的が述べられることが多い。そして、言語スキルのなかで会話能力を上達させたいので、授業に日常会話の練習を多く取り入れてほしいという学習ニーズも依然として高い。韓国訪問が従来に比べ容易になったとはいえ、日常生活において韓国人と接する機会が少ない状況から、他の言語スキルに比べ「話す」能力を伸ばす機会は依然少ないからであろう。事実、受講生の自学状況をみるとインターネット記事の検索、SNSでのやり取り、日本語字幕付きの動画の視聴が圧倒的に多く、「話す」活動は少なかった。

以上の状況を踏まえて、カリキュラム設計や受講生の学習状況およびニーズを考慮し、本授業では、グループワークや発表の中で全員が韓国語を話すような仕掛けを作り、スピーキングの機会を相対的に多く確保できる授業運営を図った。学習テーマについても、韓国理解の入り口となる日常性に富むテーマ、かつ本格的な韓国理解につながるものを選定するように心がけた。日常的に使える韓国語表現が多く習得でき、日韓比較につながる気づきも得やすいメリットがあると考える。本テキストは、初・中級レベルの受講者が身近なテーマについて日韓比較を行うなかで韓国の言語・文化について理解し、日韓相互理解を深めていくことを想定しており、本授業に適した教材であると考える[8]。

（２）韓国トレンドを韓国語で読み解く教育実践

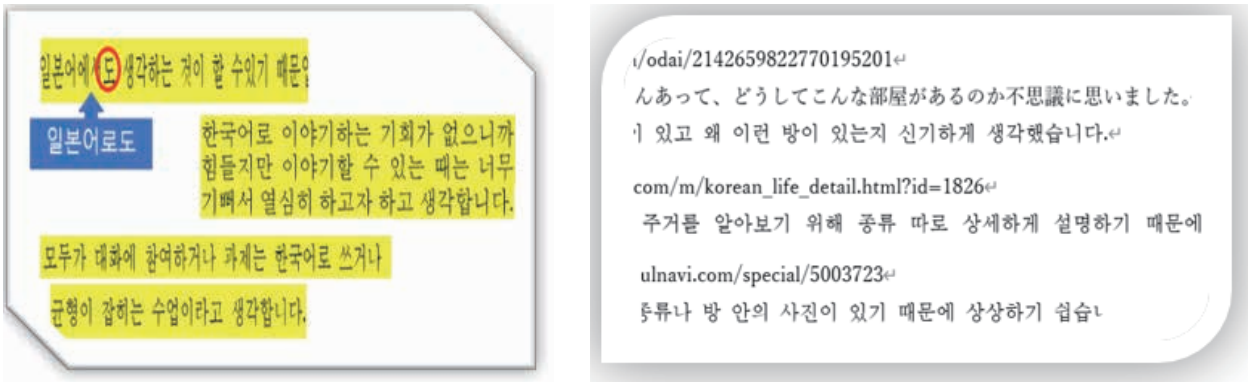
初回の授業において、受講生の学習目的および目標、学習歴、韓国訪問経験、そして関心のあるテーマなどについての確認を行った。受講生数は例年より少ない７名で、初修外国語の初・中級クラスに最適な少人数制の学習環境といえる。韓国訪問についてみると、３週間～１か月程度の語学研修や日韓交流活動など、期間に差異はあるが、全員が訪問経験を持っていた。

本テキストは全部で８頁構成になっていることは前章で説明した通りである。本授業では、８頁の内容について授業前―授業中―授業後の大まかな段階分けを行った。本テキストには自主学習やグループワークが求められるコーナーが多く設けられている。



＜受講生のノート例＞

8　「大阪教育大学・教育協働学科多文化リテラシーコース」では「多文化リテラシー」の「読み書き」の意味を「理解/体験/感覚」とより広い意味で解釈している（www.osaka-kyoiku.ac.jp , 2019.12.24アクセス）。文化的テーマと言語学習を融合させ、受講生の自学強化と積極的な授業参加を推奨する本実践研究の構想と重なるところが多い。




＜受講生のノート例＞

それらの項目を活用した事前・事後学習の強化については、限られた授業時間のなかで言語と文化のどちらの探究意欲をも充足できる取り組みとして、受講生の合意が得られた。一連の学習プロセスについては自学ノートおよびYPUポータル上のコミュニケーションボードを活用して管理した。言語４技能の強化、文化理解および自分の意見を表現する、さらには学生が学習過程のマネジメントを主体的に、バランスよく継続できる授業運営を心掛けた。

事前学習は「トピック本文・核心表現：コンセプトを読み解く」「ことばの森：テーマ関連表現」を中心に行った。語彙の確認、核心表現を使った短文づくり、トピック本文の和訳などである。その際のオンライン辞書の使用については文章、文脈に最も適した表現を多様な語意例から求めるよう注意を促した。核心表現については、なるべく日常的な、身近な話題について短文づくりを行うようにした。課題については授業前にチェックするとともに間違いの多い表現については授業中に全体で確認を行った。

授業中は「絵をみて話してみよう：気になる？⇒気づく!!」「エピソード：違いを知る・尊重する」「スキットを完成させよう!!」「コンセプトを広げる：マインドマップであそぼう」コーナーを使用して会話練習、クラスメートとの視点・考えの違い（身近な異文化）に気づく機会として活用した。いずれのコーナーでも「自分の考えをメモする」「ペアで話し合う」「グループで共有する」の手順に沿って、「自分のアイディアや考えを伝える」「韓国語で表現する」「日本と比較してみる」「クラスメートと対話する」活動を行った。テーマと関連しては、マンション[9]の韓国社会における位置づけや考え方、団地の規模や付帯施設、内部構造の特徴などについて話し合ったり、韓国のおひとり様トレンドについて日本の状況と比較検討したりと、身近なテーマを取り上げた。

事後学習としては「学びのひろば：主体的に学びを深める」「＜テーマへの道しるべ＞：資料探究」頁を主に使用した。授業で取り上げたテーマをめぐる新たな視点・発見を促す自学活動である。資料の紹介の際には推奨の理由も韓国語で簡潔に説明するようにして、言語スキルと文化理解という両方の能力を育成できるように図った。「アパート社会」に関連する資料紹介を例にみると、「部屋のレイアウトの違いが気になったので」「日本と韓国のアパートに関する考え方の違いが分かりやすいから」「韓国の賃貸制度についてわかりやすい」など関連サイトを選定・紹介する理由を、日韓比較も意識しながら日本語・韓国語でコメントしている。「ひとりご飯」については「ほかの人に目立たないところがあれば大丈夫」「店に同性が多かったら、気楽に入れます」「一人で食べている人がいれば、そこには入れる」「外国ならどこででも食べられる」「知っている人がいないところなら、どこでも一人ごはんできる」というコメントが続く。当事者視点を持ち込むことで「ひとり○○」のハードルが他者との関係性によって決まる状況について共有でき、他者への理解、文化的な理解が深まったといえる。また、「ひとり○○」と関連する動画「mukbang」

9　「マンション」について、韓国において「アパート」という表現が使われることが一般的であることを踏まえて、本稿でも、以後は「アパート」を使用する。

「cookbang」[10]については、「代表的な韓国料理をわかりやすく説明する」「韓国語の字幕がついてるので、韓国語を聞くのにちょうど良い」追加資料を紹介しており、必要な資料を日韓両言語で探究する様子や、ネット媒体を使った韓国語学習が多い状況がうかがえる。

最後に、授業運営と関連する学生のコメントをみると、「話す機会が少ないので韓国語で話すことは難しいが、話せたときはとても嬉しく、頑張りたいと思うようになる」「授業で全員が何かしらを発言することがよい」「日本についても考えさせられるからよい」と述べている。少人数の初・中級の語学クラスにおいて、文化リテラシー向上を目指す言語学習、アクティブラーニングのニーズがとりわけ高いといえよう。

### 3-2. 事例２：「朝鮮語実習」（中級）クラスにおける言語文化授業

（１）授業概要および受講生の特徴

今回の本テキストを用いた授業は、３年生以上を対象にしている「朝鮮語実習[11]」（後期）で実施された。本授業は、韓国の文化、現代事情に関する全般的な知識をトピックスにしていて、韓国語の読解力、聴解力、作文、会話を取り入れ総合的に韓国語運用能力を向上させていく授業である。到達目標は、辞書を使って応用表現が混ざっている文章を読み解き、日韓の文化の違いを理解した上、自分の考えや資料を韓国語で発表することに設定している。また、日本国内で最も権威のある「ハングル能力検定試験」、韓国政府が認定・実施する「韓国語能力試験（TOPIK）」への挑戦を促す授業である。

今年の履修生は７名で、全員３年生の学生であったため、少人数クラスのアットホームな雰囲気で授業を進めることができた。初回「韓国語・文化学習についての調査」を行った結果、学生全員が第一外国語で韓国語を履修していて、これまで大学で受けた韓国語関連の授業は10コマ以上であることが確認できた。韓国語関連の検定試験の資格取得の状況は、「ハングル能力検定」が５級１名、４級１名、３級１名、「韓国語能力試験（TOPIK）」は１級１名、２級３名、３級１名、４級１名で、語学力には差があるものの学生全員が資格試験にはチェレンジしていた[12]。韓国語学習のきっかけは、韓国旅行、K-POP、韓国アイドル、英語以外の言語を学びたい、韓国好きのお母さんからの影響など様々ではあるが、韓国訪問経験が全員（１回～６回）あるということから、韓国に対する興味関心の高さがうかがえる。

（２）本テキストを用いた教育実践および学生の反応

本テキストを用いた授業は、教員が「言語」の文化的背景に着目し、学生に韓国語学習への興味・関心を持たせ、コミュニケーション能力を高める効果を期待した授業工夫を実践・提案するものである。

今回の「朝鮮語実習」の授業は、文化リテラシーを意識した内容・運営が必要だったため、LL教室を利用した。毎回授業が始まる前の10分休み時間は、前方の大型スクリーンに学生希望のK-POPや韓国ドラマのエンタメ情報、グルメ、旅行など韓国に関する映像を流した。学生たちは大変興味津々な様子で、視覚・聴覚的な情報を提供することによって学生の興味や関心を喚起することができた。

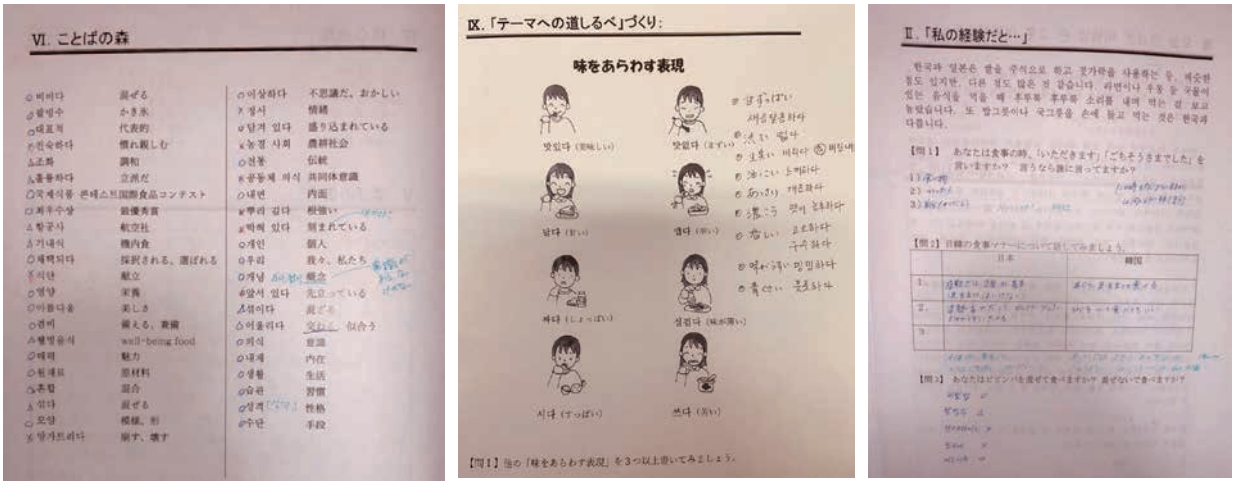
本テキストは、各単元の総８頁の構成であるが、できるだけ韓国語でみんなで話し合い、深く考えることで、多様なものの見方や考え方が存在することに気づくことを目指している。そのためには、１コマの授業（90分）では一つのテーマについて学習内容が深まらない、じっくり討論する時間的な余裕がないという懸念があった。２コマに分けて授業を行った結果、「書く・聞く・読む・話す」の「言語教育」だけではなくて、「文化理解」を深める様々な質疑応答を行うことができた。

今回の授業では、「ビビンパ」についての情報を提供し、異なる文化における気づきを促した。まず、「あなたの一番好きな韓国料理は何ですか？」

10　放送のホストが食べる映像（mukbang：먹는 meokneun 食べる＋방송 bangsong 放送）、あるいは料理をする映像（cookbang：cook＋放送）がテレビやYouTubeなどを中心に人気を得ている。外国にまで広がっている「mukbang」についてはCNNの面白い分析もある（Frances Cha（CNN）（2014.2.3）*South Korea's online trend: Paying to watch a pretty girl eat.*（2019.12.13アクセス））。
https://edition.cnn.com/2014/01/29/world/asia/korea-eating-room/index.html

11　朝鮮半島で使われる言語として「朝鮮語」と言う科目名で開講している。

12　大学の後援会から１年に２回まで、「ハングル能力検定試験」、「韓国語能力試験（TOPIK）」を受験する学生へ受験料を支援するシステムがある。また、一定の基準を満たした合格者には単位認定も可能である。




＜受講生のノート例＞

という質問に、삼겹살（サムギョプサル）、돼지국밥（テジクッパ）、핫도그（ホットドッグ）、호떡（ホットク）、치즈닭갈비（チーズタッカルビ）、라볶기（ラッポキ）、팥빙수（かき氷）、치킨（チキン）、짜장면（ジャージャー麺）、곱창（ホルモン）、갈매기살（カルメギサル）など、初心者向けのものから本格的なものまで若者が注目するグルメの返事が多いことから、韓国の食べ物が学生たちに深く浸透していることが分かった。韓国の食べ物や料理に関する内容を写真や動画（You-Tube）などを用いて紹介した後[13]、「日韓の食事マナー」について話し合いの場を設けた。韓国では日本と違って、音を立てない、器を持たない、膝を立てる、あぐらを組む、食べ物を残す、箸と匙を使い分ける、直箸でおかずを食べる、肘をついても良いなどの意見があった。

また、「あなたはビビンパを混ぜて食べますか？」の質問には、ほとんどの学生が小学校の給食でビビンパを食べた経験があり、担任の先生から混ぜて食べるように指導されたと話した。他に混ぜて食べる食べ物として、ドリア、納豆、みそ汁をあげたが、カレーやカギ氷などは見た目が汚くなるし、子供でもない限り混ぜないという意見があった。

ここで教師の役割はとても重要であると考える。「日本／韓国は～である」「日本人／韓国人は～である」などの結論を出すことなく、学生の意見を見守り、少数派の意見にも光を当てたり、必要な時は助言したりすることが必要であるだろう。韓国語の語彙数の少ない学生、日頃発言や発表に躊躇しがちだった学生でも、とっつきやすい「ビビンパ」というテーマには「韓国の食べ物について話してみたい」という強い動機付けになったようで、積極的に発言する場面があった。話題や題材の選択に当たっては、教員が何かを教えるというより、いかに学生に自分の意見を言わせるかを念頭におくことが重要であると改めて感じた。

次に、コンセプトを読み解くトピック本文に入る前に、テーマと関連した表現（ことばの森）の語彙理解度を「○、△、×」で自己評価してもらった。個人差はあるものの、語彙43個のうち平均、分かる「○」が18個、微妙「△」が５個、分からない「×」が20個で、学習者のレベルに合った適切な本文であることが確認できた。

「＜テーマへの道しるべ＞：資料探究」の「味を表す表現」では、関連した他の表現を３つ以上調べる問いにも、새콤달콤하다（甘酸っぱい）、떫다（渋い）、비리다（生臭い）、느끼하다（油っこい）、개운하다（あっさりしている）、농후하다（濃厚だ）、고소하다/구수하다（香ばしい）、밍밍하다（味が薄い）などの表現を自ら調べ発表することができた。最後の授業感想では、「面白かった」「とても楽しかった」「興味深かった」「文化には優劣がないと感じた」などの意見が多く見られた。「好きこそ物の上手なれ」で、自発的で自律的

13　門脇薫（2013）は、異文化理解を促す方法として、①認知学習　②体験学習をあげている。認知学習は、資料を読んだり説明を聞いたりすることで知識を得ることであり、体験学習は、実際の社会生活で遭遇する場面を疑似体験する方法である。教師は一方的に知識を伝達するだけではなく、様々な媒体を使って異文化を体験させる必要があると指摘している。

な学習につながることを期待する。

以上、本テキストを用いた授業において、異文化を知ることで、自文化を再認識する場面も見られた。自文化と違う韓国文化に対する知識・情報を収集・理解するという観点から、異文化リテラシーの向上に役割を果たしたのではないかと考える。

### 3-3　事例3：韓国語中級クラスにおける言語文化授業

（１）授業概要および受講生の特徴

本テキストを用いた実践教育は、３年次を対象とする少人数（８人）の中級クラス（後期）の授業において行われた。この授業は韓国語のコミュニケーション能力を向上し、日常生活で必要とされるフレーズを中心に、自分が表現したいことを韓国語で表現できることを目指している。また、応用文型まで幅広く会話形式で練習することで、コミュニケーション能力を高めると同時に、グループ発表の時間を設け、異文化理解を深める契機とすることも目的のひとつである。１年次に４コマ（１コマ＝90分；選択必須）、２年次には２コマ（選択）、３年次の前期１コマの韓国語会話を履修しているクラスで、受講生はハングル能力検定試験３級、あるいは韓国語能力試験３～４級レベルを目指している。

初回の授業では授業の概要と学習歴調査のためのアンケートを行った。韓国語学習へのモチベーションが高い学習者はK-POPや韓国のアイドル、SNSなどを通して日常的に韓国語とのふれあいに慣れている場合が多かった。グループワークの際は、討論の結果を発表する順番をローテーションして行うことで、誰もが平等に発表の機会を持てるよう配慮した。

次は、頁ごとにどのような形で授業を進めたかについて紹介したい。

「絵をみて話してみよう（気になる?⇒気づく!!）」では、なるべく受講生の考えを聞きだすまでは教師から何の情報も与えないようにした。イラストを一瞬見た後、問いを読んで真っ先に何が浮かんだのか一人一人に確認した。少人数クラスだからこそ、可能なことである。

「エピソード：違いを知る・尊重する」では事前学習として、前回の授業で日本語文を韓国語文に訳出してくることを課した。授業では、まず読み合わせ、意味の確認を行った。教師が本文に書かれているもの以外についても韓国語で経験談を紹介しながら、学習者の経験したことが言えるように促したところ、「そうそう！」「あるある！」といった反応が帰ってきた。

「トピック本文・核心表現：コンセプトを読み解く」では前の段階で話し合った内容を深めたトピックの韓国語文を和訳し、その際に「核心表現」を軽く紹介する程度で説明し、「核心表現」を用いて作文できるワークシートを課題として配布した。「トピック」の内容が把握できたら「学びのひろば：主体的に学びを深める」に①自分が新たに分かったこと②内容の中で覚えておきたいこと③さらに深く調べたいことを中心にメモし、それ以外に書きたいものを自由に書くように誘導した。「メモ」した後、グループワークでお互い書いたものをもとに意見交換ができる時間を与えた。その際に友達の意見を参考に自分が書いたメモを添削してもよいことと、なるべく韓国語で話すことが望ましいがうまくコミュニケーションが取れない場合は日本語でもよいことを伝えた。

「ことばの森：テーマ関連表現」では事前学習として「ことばの森」のリストに辞書を引かなくても良いものには○印、学習したことはあるが覚えていない曖昧なものには△印、全然学習したことのないものには×印をつけて、辞書や辞書アプリケーションで調べて必要な内容を書かせる。それによって学習者の学習状況を学習者のみならず教師自身も視覚的に確認できるようになる。

「スキットを完成させよう!!」ではペア（毎回ペアは変わるように指示）を決め、関連場面やシチュエーションを学習者自ら設定し、スキットを作成させる。それを暗記し、教室の前に出て演じることまで行う。この際、イントネーションや人物設定にふさわしい演技まで発揮したペアには加算点を与える。

「コンセプトを広げる：マインドマップであそぼう」では関連するキーワードを数箇所のみ提示し、空いたところを埋めさせる。さらにキーワードが思い浮かんだら線を引いて広げてもよいと伝えた。ただし、その広がりが唐突なキーワードに見える場合は、その理由について口頭で確認した。「＜テーマへの道しるべ＞：資料探究」では教師が提示した参考資料以外に学習者がクラスのみんなに紹介したい情報を調べて書き、なぜそれを選んだのかも一言ずつ書くように指示した。

（2）本テキストの実践教育および学生の反応・気づき

（1）で紹介した授業の進め方において、学習者の反応や返答からどのような気づきや結果が得られたかを紹介したい。

「絵をみて話してみよう（気になる？⇒気づく!!）」ではイラストを見て「出前のバイク」「出前のチラシ」「混ぜたビビンバ」「韓服と和服」「間取り」など、受講者にわかりやすい絵であることがわかった。ここでは「配達文化」の支払い方法をめぐって「キャッシュレス」「ラインpay」「ウーバーイッツ（Uber Eats）」などの最新の用語が多くみられた。

「エピソード：違いを知る・尊重する」では書かれている経験談を補足しつつ、より具体的に説明すると、受講生の関心も高まった。まず、韓国に留学経験のある学習者を指名して意見を聞いた後、全員に同じように聞いてみた。「ホテルで出前を頼んだ経験」「韓国でのデリバリーサービスの失敗談」「成功した時の達成感」「カレーを混ぜて食べる韓国人を見たときのカルチャーショック」「観光地で試着した韓服の着用感」など、様々な意見を聞くことができた。

特に「食」に関するトピックでは、食事前後に言う「いただきます」「ごちそうさまでした」の挨拶を「一人の時もするのか」、「誰に挨拶しているのか」の質問に対して、意外と答えるまでに考える時間が長かった。それから「もしビビンバは混ぜて食べる料理だと知らなかったならそのまま食べるのか、混ぜて食べるのか」を聞いたとき、「混ぜないで食べる」という答えが多く、「それはどうしてだと思いますか？」と尋ねたら「日本には混ぜて食べる文化があまりないから」との返答がかえってきた。

「日本でこんなものをデリバリーしてほしい」項目には駅に置きっぱなしの自転車、お母さんの手料理、アイスクリームやチメク（チキンと生ビール）が多かった。それから日本もウーバーイッツが導入されたが、利用できない地域が多いので、デリバリーできる地域とメニューを増やしてほしいという意見もあった。

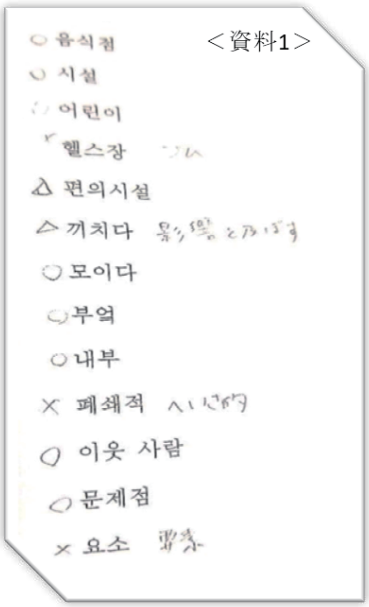
授業後の感想として、「こんなの真面目に考えたことがなかったので、よい機会になった」という意見があった。そして異文化理解とは、自文化を基準とした視点で解釈したり、異質感を考えたりするのではなく、ありのままの異文化を尊重できるようになったという意見もあった。このような考え方の転換こそ、異文化理解を通して自文化の再認識をもできたところであろう。

学習者同士のコミュニケーションで「そうそう！」「あるある！」という反応が多く見られ、クラスの学習者同士の話しやすい雰囲気づくりにもよかったと考える。しかし、留学経験のある人は話したい内容が多く、韓国語での発表もスムーズなのでどうしても話す時間の配分が長くなってしまう。こうした点は調整が難しいが、今後改善を要する部分として課題としたい。

また、「韓国と日本の住まいの比較」で韓国の一般的なマンションや住居の構造がわからない人が多かった。韓国の一般的な家庭を訪問した経験をもつか、学習者が韓国通で、韓国の家庭の様子を映している芸能プログラムを見ている学習者でなければ、難しい問いだったと気づいた。映画やドラマに出てくる住居は富裕層の住宅か貧困層の家といった、対比的な階層の描き方が多いため、一般的なマンション暮らしが描かれているのを見るチャンスは少ない点が指摘できる。

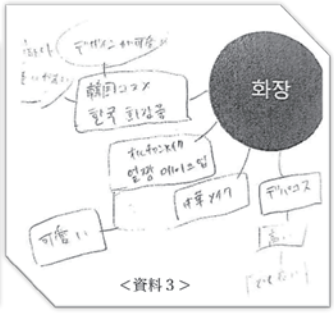
「トピック本文・核心表現：コンセプトを読み解く」は事前学習があったため、授業では新出語彙や読む際の発音の矯正と自然な和訳程度のフィードバックで進めた。自然な日本語に訳しにくい表現の場合、どのように訳したほうがいいか補足した。受講生はある程度の学習歴を持っているので、「核心表現」を軽く説明し、課題として配布した「核心表現」のワークシートは少しのフィードバックでも十分足りた。

「学びのひろば：主体的に学びを深める」には学習者個人の関心分野がはっきりと表れていた。「メモ」した後、グループワークでお互い書いたものを持ち寄って意見交換し、「どんな意見が多かったか」「珍しい意見」などを発表する人を



＜資料1＞

＜資料２＞



＜資料３＞

決める。そのグループ内でお互いに発表者の韓国語の表現を訂正してあげたり、発音を教えあったりする場面もあった。

「ことばの森：テーマ関連表現」では事前学習として「ことばの森」のリストに○印、△印、×印をつけて、辞書や辞書アプリケーションで調べて必要な内容を書かせたものが＜資料 1 ＞である。この印をつけておくことで自分の知らない単語をもう一度確認できる効果がある。初級テキストや中級テキストにない語彙を中心に×印が多かった。時事や歴史、伝統に関する語彙が多いことがわかる。それに比べて新造語やスラング表現においてはSNSにおける韓国語へのふれあいが多いためか、教師よりも習得しているものが多かった。

「スキットを完成させよう!!」ではペアスキットを発表する時、イントネーションや人物設定にふさわしい演技まで発揮したペアには加算点を与えると、真面目に取り組むチームが多くなり、発表しない学習者もほかのペアの発表に集中していることが感じられた。

「コンセプトを広げる：マインドマップであそぼう」では自由に線を引いて広げてもよいと伝えると、関心が多い分野で書き込みが増えすぎて、書き切れない状況も生じた＜資料２、３＞。そのため、原案のメイン・キーワードの出し方を見直し、頁内に学習者が書けるスペースを増やすために、メイン・キーワード○を小さくすることで問題解決を図った。

ここで、キーワードの広がり方の一例を挙げると、＜資料 2 ＞を見ればわかるように「早い配送」から「人権問題」まで考え、「配達の増加」から「環境汚染」まで広がり、テーマの長所短所を把握していることがわかる。また、「友達の広がり方を見てどのように感じたか」という質問に「自分の思考にもっと柔軟さが必要だと思ったことや、いい刺激になった」と答える学習者がいた。

「＜テーマへの道しるべ＞：資料探究」では教師が提示したサイトの閲覧や関連イラストより、すぐ使えるアプリ「デリバリーアプリ、ヨギヨ、配達の民族など」の紹介やSNS「モクパン動画」「オルチャンメイク動画」を通してより多くの韓国文化と接しているのがわかった。最近の学習者はSNSの動画を日常的に見ながら簡単に情報を手に入れ、友達と共有しているので、そういう形では習得できないものを取捨選択し、授業のなかで取り入れる必要もあると考えた。紹介する情報には「なぜこれを紹介したいのか」という理由も書かせ、その内容から話題が広がっていった。

本テキストを用いた学習が終了してから事後アンケートの実施を通して、本テキストの良さと改善点を確認することができた。異文化を通して自文化を再認識することによって、自分の異文化に対する意識の変化がみられたことは大きな成果といえる。また、「歴史や政治の話ではなく、自分達の関心分野をテーマにしたものなので苦ではなかった」という意見もあった。

改善点としてはポートフォリオや自己評価欄の作成が望ましいと考えた。毎回授業での記録だけではなく自分が感じたことまでメモし、それをポートフォリオや自己評価欄の形で最後に確認すれば、学習能力だけではなく、異文化への意識の変化や韓国語の言語習得の変化まで確認することが可能なはずである。それから本テキストの文化リテラシーを意識した韓国語教育の有効性を再確認した。つまり、段階的に学習動機の誘発、経験談の発言を誘導、言語スキルと文化理解、能動的なスキルのペア活動のアクティブラーニング、自学自習およびグループでの報告に至るまでバリエーション豊富で異文化に対する違和感を最小限にした学習方法であると言える。

## 4　おわりに：言語・文化融合型テキストを用いた主体的な学びの可能性

本稿では、大学における韓国語教育において言語と文化を融合した授業をどのように運営していくか、そのためにどのようなテキストが求められているか、に関する実践的な考察をまとめたものである。韓国語の初・中級者を対象とするテキストを作成し、実際に複数の大学で授業実践を行い、その結果と課題について考察した。韓国語の場合、初級クラスにおいて学習歴にばらつきがあり、学習目標を定めにくい場合が多い。多くの大学のカリキュラムでは、韓

国語が第二外国語の位置づけになっており、結果的に中級を目指す学生は相対的に少ない。また、受講生の中には文化的なイッシューに関心の高い学生が多く、語学のみならず文化学習ニーズも充足できるような授業運営が課題となっている。少人数クラスに適した学習活動や、言語と文化について同時に学べるテキストが求められる所以である。

以上の状況を踏まえて、本研究では、文化についての理解を深める過程のなかで韓国語が学べるテキストとして『Enjoy!!韓国言語・文化』を開発した。学生目線のテーマとして、資料探究が相対的に容易である衣食住を軸に各課のテーマを設定した。より今日的な場面設定や言語表現を重視したことも学生の能動的な授業参加につながったと考える。言語面では相対的に使用頻度が高い初・中級レベルの表現、文法項目に重点をおいた。

テキストの特徴および言語・文化を融合した授業運営の成果は、各大学での授業実践報告から確認できた。日韓の文化的な差異や共通点をめぐるアイディアや議論が盛り上がり、事前・事後学習の強化にもつながったように見受けられる。自学による予習・復習を活かした内容構成、グループ活動による学習項目を多く設けたことが、受講生の主体的な授業参加を促す刺激となったようだ。グループワークや発表の中で全員が韓国語で意見を述べるようにした仕掛け、すなわち、スピーキング項目を多く設定したページ構成の有効性については学生からも肯定的なリアクションが多く得られた。言語能力のばらつきによって受講生の学習意欲が低下したり、学習目標がクラス単位で一方的に設定されることで学習が困難になったりする課題についても、少人数制のクラスならではのグループ活動を強化したことにより改善がみられた。言語４技能の習得のみならず、テーマについての議論、内容の要約、追加資料の探究を加えるなど、文化的な関心を深め、発信する学習活動を多く取り入れたことが自学習慣の強化につながっている状況も確認できた。

本実践研究は、言語と文化を融合した総合的な語学授業の必要性、学習者参加型の授業の可能性、そして本テキストの効果について検証を試みたものである。実践研究を通して、学習者が自らの学びをデザインし、習慣化を図る仕掛けを提供する、さらに授業中の学習活動のなかで自学内容を活用できる工夫を重ねる重要性についても示唆を得ることができた。近年のアクティブラーニングや生涯学習への関心ともつながる教育・研究として、テキストおよび授業方法については今後も継続的に改善を図っていきたい。

**【謝　　辞】**

各大学の受講生の方からテキストの改善及び言語文化授業について多くの示唆を得ることができました。心より感謝申し上げます。

**【参考文献】**

・OH Hyangsun(2014)「韓国語言語文化教育に関する一考察」『下関市立大学論集』vol.6、 pp.1-27.
・門脇薫(2013)「映像作品を利用した異文化理解のための日本語教育」『日本学刊』第16号、pp.4-22.
・CHO Hangrok(2010)「国際語としての韓国語の現状と課題」『外国語としての韓国語教育』35巻、延世大学校言語研究教育院韓国語学堂、pp.351-352.
・長谷川由起子、藤原三枝子(2014)「教師の教え方等と学習者の心理的欲求･動機づけの関係」『新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で使用できる共通言語教育枠の総合研究』(日本学術振興会科学研究費助成金 基盤研究(A)研究成果報告書23242030)

**【参考サイト】**

・文部科学省の有識者会議(2011年8月29日)「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」(コミュニケーション教育推進会議審議経過報告)、2019年12月29日アクセス.
https://www.geidankyo.or.jp/12kaden/sites/default/files/pdf_com20110829.pdf